

アメリカで育てる

永住や長期滞在の子どもの教育のために

INFOE（海外子女教育情報センター）

松本輝彦

第 17 回

現地校での学習（1）

— 質問・発言の大切さ —

「なぜ、現地校では、こんな勉強をさせるの？」保護者からの、ご自身の日本の学校での経験を元にした、質問です。

「現地校での学習」のコラムでは、日本とアメリカの学校教育の目的・方法を、具体的に説明してみます。

今回、1 回目は「現地校での、授業中の質問・発言の重要性」について、述べてみます。

「授業中の発言が少ない」？

「授業中の発言や質問が少ない」「より積極的な授業参加を」と、お子さんの質問や発言の少なさを、学期末・学年末の成績表に記入されたり、保護者面談で現地校の先生から指摘されることがあります。

「日本人の子どもは、内気で恥ずかしがり屋」というステレオタイプで判断している現地校の先生もいますが、日本からやってきた子ども達が「質問ベタ」なのも事実です。

実は、この「授業中の発言の少なさ」の背景には日本とアメリカの学校教育の違いがあるのです。

日本：質問するのは恥ずかしい！

日本の子ども達（小学生から大学生まで。あるいは大人も？）は、「授業中に質問することは恥ずかしい」と言います。

大学の講義中の反応があまりにも少ないので、少しイライラした私が学生にその理由を聞くと、『『そんな簡単なことも分からないの』とクラスメートや先生に思われると、恥ずかしいから』との返事です。この「質問することは恥ずかしい」との思い、その結果の発言や質問の少なさは、実は、日本の学校教育の中でうけた指導や教育の結果なのです。

日本では、授業中に質問した生徒に対して、「お前、授業をちゃんと聞いていなかったのか!？」と詰問する先生すらいいます。その先生の言い分は「僕は、ちゃんと説明をした。その説明で理解出来ないのは、生徒の努力不足だ。」です。そして、その思いは、「教師の話を聞いて理解するのは、生徒の責任だ」、もっと極端には「先生の説明はいつも完璧だ」という考え方にに基づいています。

この考え方の先生達に指導を受け続けた子どもが、「質問することは恥ずかしい」と思い、発言が少なくなるのは当然です。

アメリカ：質問されるのは先生の恥？

一方、アメリカの先生は「子どもが質問をするのは、私の説明が不十分な証拠だ」と考えています。自分の授業内容を子ども達がしっかり理解したかどうかを確かめるために、「Any questions ?」と子ども達に何度も問いかけます。そして、出てきた子どもの質問を聞いて、時には前とは異なる新たな説明をして、子どもに理解してもらえよう努めます。そして、「これで分かった？」と再確認することになります。

この、子どもに質問を繰り返し求める姿勢は、「子どもに理解させる責任は先生にある」とのアメリカの教育文化が背景になっています。

質問を活用する授業

現地校での質問の大切さには、もう一つの理由があります。それは、子どもからの質問を活用してクラスの子どもの全員の授業内容への理解を深める授業方法の活用です。

「くだらない質問はない!」は、現地校の先生の口癖です。一人の子どもの質問が、他の子ども達が抱いていたのと同じ疑問である場合が多くあります。また、その質問が、他の子ども達が「分かったと思い込んでいた」、基礎的で重要な内容の場合もあります。これらの場合は、先生が質問に答えることにより、授業内容や先生の説明をクラスの子どもの全員がよりはっきりと理解するのに、大きな助けとなります。

さらに、新しい質問が、クラスメートの誰も思いつかない、全く異なった視点に立ったものであることもあります。それが、先生の説明の範囲を超えたよりレベルの高い、時には先生自身も思いつかなかったような創造的な質問である可能性があります。その場合は、先生の説明した授業内容を発展させ、より深い理解を、子ども達が得ることになります。